



小学生を対象にした 防火査察ツアー 【F(エフ)育】の実施



北海道 釧路市消防本部

事例類型	Ⅳ他団体との連携／Ⅴ人材育成／Ⅵ広報活動
取組期間	平成30年4月から

背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災の教訓を活かし、国では、近い将来発生が懸念される「南海トラフ地震」「首都直下地震」「火山噴火」など大規模自然災害等の備えとして、災害に対する「強さ」と「しなやかさ」を持った安全・安心な国土・地域・経済社会の構築を推進するため、2013年(平成25年)「強くしなやかな国民生活を実現するための防災・減災等に資する国土強靱化基本法」が公布・施行された。この基本法に基づき「国土強靱化基本計画」が策定され、当市においても「釧路市強靱化計画」を策定し、さらに、「釧路市まちづくり基本構想」においても地域内の主体がテーマを共有し、それぞれの強みや地域資源を生かしながら、付加価値の創造や地域課題の解決に向け行動する域内連関に取り組んでいる。

過去には釧路沖を震源とした大きな地震、北海道東部を襲った集中豪雨、記憶に新しい胆振東部地震による停電(ブラックアウト)など、数多くの自然災害を経験し、今、当市において30年以内に震度6弱以上の地震が発生する確率は69%であると言われており、この「域内連関」をキーワードにツアーを実施することとなった。

内容

釧路市立鳥取小学校の協力のもと、事前に消防の仕事や防災について興味のある児童(5、6年生)を募集した。通常、夏休み期間中に実施している立入検査を児童の補助講義に合わせ1時間程度設定し職員に同行するという形をとった。

テキストを事前作成のうえ配布し、「見る、触る」をベースに、クイズなどを織り交ぜ、自分たちが普段過ごしている学校の避難経路等を確認したほか、消防用設備等の設置及び維持管理の重要性について検査しながら認識を高めた。

また、一般住宅に潜む火災危険箇所チェックを勉強し、帰宅後自分の家を査察し、その結果を家族と話し合うこと、さらに、災害発生時の行動等を家族で話し合ってもらうため、テキストに「災害避難カード」を盛り込み、完成させるよう児童と約束をした。

成果

学校という身近な施設に設置されている消防用設備等だが、普段は「触ったらだめ!」と教えられており、屋内消火栓設備の内部や防火戸の仕組み等、実際に見て、触れて、重さや構造などを体感したところ、児童たちは目を輝かせながら強い関心を示していた。

実施後、数名の参加児童から、「家の査察をやった」「住宅用火災警報器がついていなかったからお父さんにつけてもらった」などの報告があり、学んだことを友人や家族と話し合い、協力して防火・防災に取り組んでくれたことに大きな可能性を感じた。

終了後のアンケート調査結果では、

- 煙のスピードは速い
- 次またこのようなことがあったら、たくさんの友達に教えてあげたい
- 逃げるとき、どんなことに気をつけるか家族や友達にも教えたい
- いつも気にしていないけど、大事なことがわかった
- 今回参加していない人にも参加して欲しい
- 消防士の仕事は、火を消すだけではないとわかった

などの意見があり、多くの児童、教員が満足したと回答していた。

また、今回の取り組みに関する新聞報道を見た幼稚園、小学校、中学校、高校等から、「F育」に興味を示す問い合わせがあったところである。

特記事項

F-エフ-育について

- Fire Fighter …… (消防官)
- Future …………… (未来/将来の可能性)
- Family …………… (家族/子供たち)

従来、児童のいない夏休みに実施している学校の立入検査を消防官と児童と一緒に実施し、①有事の際の避難活動を円滑にする、②自ら考え行動できる防災リーダーを育成する、③消防の仕事について理解を深め関心を持ってもらう、さらに、防災という言葉に軸に家族とのつながりを大切に、コミュニケーションを深めてもらうことを目的とし、上記のように、それらの頭文字をとって『F育』と名づけた。

【F育に関する新聞報道】



北海道通信
2018.8.7



釧路新聞
2018.8.1



テキスト表紙